

# 笠置寺経塚の基礎的研究

橋本 侑大

総合研究大学院大学 先端学術院 日本歴史研究コース

## 要 旨

京都府相楽郡笠置町に所在する笠置寺は、弥勒磨崖仏を本尊とする弥勒信仰の聖地である。笠置寺の境内からは、銅製経筒や陶製経容器などの経容器類と和鏡や合子などの副納品類が出土しており一通りの経塚関係遺物が揃っているが、これまで笠置寺経塚について総合的に検討した考古学的な研究は行われてこなかった。そこで、笠置寺経塚について明らかにするために、各出土遺物の法量などの基礎情報や所見を提示したうえで、各出土遺物の時期や性格の検討を進めた。その後、各出土遺物に関する検討の成果を総合することで、笠置寺に造営された経塚の地域的な性格や造営時期についての考察を行った。近畿地方で研究の進む銅製経筒や陶製経容器、瓦質経容器などの経容器類からの分析を中心として進め、近畿地方における類例や使用時期、使用した造営主体についての検討を行った。

それぞれの出土遺物について検討した結果、笠置寺経塚の造営時期は12世紀であることがわかり、特に経容器類やその類例から12世紀第2四半期から第4四半期頃に複数の造営主体によって造営が行われた可能性が高いことが明らかになった。複合経塚では、室町時代まで時期が下る経筒が含まれている遺跡がみられるが、笠置寺経塚では室町時代に下るような経筒の発見はなく、笠置寺の経塚は12世紀を中心とした時期に造営され、その期間は長期には亘らないと考えられることが明らかになった。

また、銅製経筒の型式と、三筋文をもつ陶製経容器や瓦の製法による瓦質経容器などの京との関係の深さについて示すことのできる経容器類が出土していることで、京との関係の深さを考古学的に裏付けることができる結果となり、経塚のもつ地域的な性格が明らかになった。笠置寺での埋経行為については、『玉葉』に文治元年（1185）に九条兼実の弟である慈円を願主として行われた埋経の記録があり、京の貴族層による埋経が行われたことが確実な経塚であったが、考古学的な検討からも京との関係の深さを裏付けることができた。経塚関係遺物から造営主体の性格や遺跡の造営時期が明らかになったことで、当該時期の社会動向や信仰のあり方を経塚研究から検討する研究の可能性の一端が窺えることとなった。

キーワード：笠置寺、経塚、経筒、外容器、経容器、陶製経容器、瓦質経容器、弥勒信仰、埋経

---

# A Fundamental Study of the Kasagi-dera Temple Sutra Mound

HASHIMOTO Yuto

Japanese History,  
Graduate Institute for Advanced Studies, SOKENDAI

## Summary

Kasagi-dera Temple, located in Kasagi Town, Soraku District, Kyoto Prefecture, is a sacred site of Miroku worship, with a Miroku rock-carved Buddha as its principal image. From the grounds of Kasagi-dera temple, various types of sutra containers, such as bronze sutra cases and ceramic sutra vessels, as well as accompanying items, have been excavated, which provides a complete set of sutra mound-related artifacts. However, no comprehensive archaeological research has been conducted on the Kasagi-dera temple sutra mound to date. Therefore, in order to clarify the nature of the Kasagi-dera temple sutra mound, we presented basic information and observations on the excavated artifacts and conducted research on the period and characteristics of each artifact. Subsequently, based on the results of the examination of the excavated artifacts, we examined the regional characteristics and construction period of the sutra mound. The examination was conducted mainly based on analysis of the sutra containers, and we examined similar examples in the Kinki region, the period of use, and the builders. Excavated artifacts reveal that the structure was likely built by multiple builders between the second and fourth quarters of the 12th century.

Bronze sutra cases and ceramic and tile sutra vessels that were excavated indicate a connection with Miyako. This provides archaeological evidence of the deep connection with Miyako and clarifies the regional characteristics of sutra mounds. There is a record of a burial ceremony conducted at Kasagi Temple in 1185, with Jien, the younger brother of Kujo Kanemitsu, as the sponsor, confirming that this site is a reliable archaeological site where burial ceremonies were conducted by the aristocracy of Kyoto. Archaeological research has also confirmed the deep connection between this site and Kyoto. The artifacts excavated from the sutra mound have revealed the nature of the builders and the construction period of the site, suggesting the possibility of understanding social trends and religious beliefs through the study of sutra mounds.

**Key words:** Kasagi-dera temple, sutra mound, sutra case, outer container, sutra container, ceramic sutra vessels, tiled sutra vessels

はじめに

1. 笠置寺の経塚について
2. 出土遺物
  - 2.1 経容器
  - 2.2 副納品

3. 笠置寺経塚の位置付け

- 3.1 出土遺物にみる笠置寺経塚
  - 3.2 『玉葉』の記載と経塚の造営位置
- まとめ

## はじめに

京都府相楽郡笠置町に所在する笠置寺の境内からは、経塚関係遺物が多数出土しており、中世の信仰について窺うことができる重要な資料群であるが、これまで笠置寺に造営された経塚について総合的に検討した考古学的な研究は行われてこなかった。筆者は、2023年に笠置寺経塚の出土遺物について、陶製や土器製の経容器類を中心に実見する機会を得て基礎的な研究を進めたので、各出土遺物の所見や調査の成果を提示し、笠置寺経塚の位置付けについて示したい<sup>1)</sup>。

経塚が造営された笠置寺は、弥勒磨崖仏を本尊とする弥勒信仰の聖地であり、この地に造営された経塚は経塚研究においても重要な意味を持つが、個別の遺物に言及した事例はあるものの、すべての経塚関係遺物を扱った研究は行われていない(写真1)。その背景には複数時に亘る遺物の発見が、すべて発掘調査によらない不時の発見であることが一つの要因としてあると考えられる。しかし、笠置寺の経塚関係遺物には、銅製経筒や陶製や瓦質の経容器(外容器)類、



写真1 弥勒磨崖仏と正月堂

鏡や合子等の副納品類が一通り出土しており、総合的な検討を行うことによって経塚造営のかたちをある程度復元できる状況にある。笠置寺経塚出土の個別の遺物について取り上げた論考以外にも、近畿地方では青銅製経筒の型式設定や外容器を中心とした陶器製・土器製の経容器に関する研究が進められており(橋本2025; 村木1998)、こうした研究を参考とすることで近畿地方のなかでの位置付けも明らかにできる。さらに、笠置寺への埋経に関しては史料にも表れ、九条兼実の日記である『玉葉』には、兼実の弟である慈円を願主とした笠置寺への埋経の記録が記されており、史料も含めた検討が可能な数少ない経塚でもある。

本論では、一通りの経塚出土遺物が揃っており、文献に埋経の記録も残される笠置寺経塚について検討することで、不時発見によることの多い経塚から中世の社会や信仰を明らかにする新たな視点を見出し、経塚研究の可能性を模索する。各出土遺物や造営主体などの分析を進めることで、不時発見の経塚でも研究の対象とできる遺跡を増やし、従来の研究では出土遺物を中心に論じられてきた経塚の分析を通じて、経塚造営の背景にある社会や時代を論じることが可能であることを示したい。

## 1. 笠置寺の経塚について

笠置寺経塚の各出土遺物についてみていく前に、経塚の造営された笠置寺と笠置寺経塚に係る研究の動向について確認しておく。笠置寺に関連した研究は多方面からの研究が蓄積さ

れているが、笠置寺の研究やその関心は著名な弥勒磨崖仏や解脱鐘、『笠置曼荼羅図』について注目されることが多い。また、中世以降の関心は、解脱上人貞慶や醍醐天皇、南朝と笠置山などに集中しており、経塚が造営された平安時代後期から鎌倉時代の笠置寺についての研究は他の時期に比較して手薄である。これらの過去に行われた研究のなかには、笠置寺の経塚に特化した研究はないものの、笠置寺に関する論考などのなかで一部の経塚遺物について触れられているので、ここで紹介して整理しておく。

笠置寺での埋経の事実や経塚遺物の存在については既に知られており、度々笠置寺の歴史を語る際に触れている。豊島修は、笠置寺で法華経の読誦や写経埋納供養が行われた形跡として、笠置寺の本尊付近から経塚関係遺物が出土していることに言及している（豊島 1978）。豊島は、「これは寛弘四年（一〇〇七）藤原道長が「金峯山浄土」と信じられた吉野金峯山に法華経以下十五巻を埋経した事実と併せ考えると、笠置寺の写経埋納供養は弥勒の浄土に再生せんがためだけではなく、滅罪を目的として行われたものと思われる。」（豊島 1978）とその意義について考察している。さらに、豊島は笠置山での埋納供養や書写供養として、『玉葉』や『三長記』の記載についても言及しており、文治元年の『玉葉』の記載について、その埋納先は千手窟と解釈している<sup>2)</sup>。

小林義亮も「近年、笠置でも弥勒石仏のすぐ前の岩の窪みから素焼きの筒に入った銅筒が見つかっている（京都府教育委員会指定遺跡、経塚、出土品として土製経筒、銅製経筒、和鏡、銅製六器、白磁合子）。」と貴重な出土位置に関する情報を記載している（小林 2023）。

九条兼実の日記である『玉葉』には、兼実の弟である慈円が行った笠置寺への埋経について記されている。『玉葉』に記載された笠置寺への埋経に関する記事については、三宅敏之が『玉葉』に表れる埋経の記録について考察しており、こ

のなかで笠置寺への埋経記録についても考察をしている（三宅 1958）。笠置寺への埋経については、文治元年八月廿二日条、廿三日条に記されており、その内容をみておくと次の通りである。

廿二日条には、「今日山上如法経十種供養也、余調送雑具、金銅筒二、同軸二部料、表紙等先日送之、被物一重、絹裏二、簡文為結縁、余清書之、又余修<sup>3)</sup>」と記されており、廿三日条には、「無動寺法印法印相具如法経被参笠置寺、為先師法親王書写如法経、為奉瘞彼靈窟也、又書写黄紙同清浄経二部一部奉為先軀、余澹反占色紙送之、一部近年台戰之間死亡之輩、奉始先帝至于大百十為出離也、送東大寺、被奉籠大仏御身也、大将可参御方違行幸之由、親経催之、来廿五日云々、廿八日大仏供養当大将軍游行方、仍廿五日有此御方違、自廿二日大持誦<sup>4)</sup>有所劳、快得者可参之由令申了、」<sup>4)</sup>との記載がある。笠置寺への埋経は、九条兼実の弟の慈円（無動寺法印）が師のために金銅筒2本を靈窟に納めたというもので、兼実らも結縁している。

こうした記載について三宅敏之は、8月26日に帰京していることから埋納日が8月24日か25日であったと想定している（三宅 1958）。さらに三宅は、弥勒信仰の聖地である笠置寺に埋納された意義について、「即ち弥勒信仰に伴つてこの地が選ばれたと考えるよりも、この地が金峯山や熊野と同じく埋経発生当初よりの伝統をひいて、埋経を行う靈地の一つとして著名であつたのではなかろうか。従つて故人の追善といい乍ら、僧侶によつてその先師の為に営まれた場合、上述した兼実の皇嘉門院に対する場合とは異つて、亡き師の墓所近辺よりはむしろかゝる靈地が選ばれたと思われる。」（三宅 1958）と考察している。この指摘は、複数の埋経に関わる遺物が発見されている笠置寺経塚の造営意義を考えるうえで重要な指摘である。

つぎに、個別の経塚遺物について取り上げられたものについてみていく。奈良国立文化財研究所の美術工芸研究室が行った笠置寺の調査のなかで、和鏡（鳥蝶草花文様）と六器についての所見が述べられている（守田・平田 1965）。

法量などの基礎情報を示したうえで、出土地について本尊の弥勒磨崖仏周辺であること記載している。その出土状況は、「尊像の左右の土が雨に洗われて荒れていたため、前住職がその土の表面をならすために手入れをしている際に掘り出した。」とのことである。和鏡は、埋経に関わるものと想定し、その製作年代を藤原時代としながらも埋納時期は不明としている。六器については、底面に「二岩」とも読める針書きがあるとし、その製作年代は鎌倉期であるとしている。「二岩」の意味については、堂名か坊名である可能性が指摘された。こちらも埋経に関わる遺物であることが想定されているが、和鏡と六器が同時に埋納されたかについては不明であるとされた。

このほかには、伊藤久嗣による泥塔に関する分析のなかで、笠置寺経塚の泥塔に関する言及がなされている（伊藤 1993）。笠置寺経塚のものは、「舟形光背扁平宝塔型泥塔」として、その類別や経塚から伴出する事例として意義が述べられている。

笠置寺経塚から出土した経容器類については、村木二郎が近畿地方の経塚についての分析を行ったなかで近畿地方の経塚を集成しており、当時確認されていた笠置寺経塚の経容器類もこの集成表に掲載された（村木 1998）。この時に掲載された経容器は、銅鑄製経筒1点、銅板製経筒2点、常滑焼甕1点、東海系陶質三筋文円筒1点、東海系陶質無文円筒1点である。

陶器製や土器製の経容器については、筆者が2023年に行った調査の際に、これまで笠置寺経塚では存在が知られていなかった材質である瓦質経容器を含む経容器類が保管されていることを御教示いただき、併せて調査・実測図の作成を行った。こうした成果を反映し、拙稿の集成表に瓦質経容器も含めた経容器類を掲載した（橋本 2025）。この際に、陶製の三筋文経容器と瓦質経容器1点については図面を掲載し公表している。

笠置寺経塚の遺物が広く一般に公開されたのは、2023年に奈良国立博物館で開催された特別展「聖地 南山城—奈良と京都を結ぶ祈りの至宝—」であり、主要な遺物が出陳された（奈良国立博物館編 2023）。展示に出陳された各出土遺物については、基礎的な情報が展示図録に掲載された<sup>5)</sup>。

ここまで、笠置寺経塚に関する論考を中心にみてきたが、主要なすべての遺物について一度に論じられたことはなく、経塚の位置付けや造営期間も明確にできていない状況が確認できる。経塚関係遺物について、考古学的な手法による分析を行い、笠置寺経塚の位置付けについて明確にすることが必要である。埋経場所や造営主体に関しても課題があるため、出土遺物の分析を行うことで、こうした課題の解決にも繋げていきたい。

## 2. 出土遺物

現在までに発見されている笠置寺経塚の出土遺物について、法量などの基礎情報と所見を示し、出土遺物から窺える情報を整理する（表1）<sup>6)</sup>。近畿地方の経塚研究では銅製経筒に関する研究が進められ、型式設定が行われているので銅製経筒についてはそちらを参考として位置付けを検討する（村木 1998）。また、筆者は陶製や瓦質の経容器を中心として、陶器製・土器製の経容器についての研究を行ったことがあるので、その成果を反映して個別の出土遺物の位置付けを提示する（橋本 2025）。本論で扱う笠置寺経塚の研究は、拙稿に関連して行った調査成果を基にしており、陶器製や土器製の容器についての考察を中心としている。

### 2.1 経容器

#### (1) 銅製経筒

これまでに発見されている銅製経筒は3点で銅鑄製が1点、銅板製が2点である。

**銅製経筒①** 銅鑄製の経筒で、蓋が固着してい

表 1 笠置寺経塚の出土遺物

経 容 器							
遺物名	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存 (%)	色調	備 考	図番号
銅製経筒①			総高 36.5	完形		銅鑄・反花座・一段笠蓋 B 式	写真 2
銅製経筒②			29.2	90		銅板 2 枚・鎮留め 2 列・破片 1 片	写真 3
銅製経筒③			残存約 28.0	破損		銅板・壺と保管 (当初のセット関係不明)	写真 4
陶製経容器①	17.0	16.5	33.2	完形	にぶい黄	蓋破損 (口縁部付近全て欠失)・三筋文	図 1-1
陶製経容器②	16.7	17.6	30.9	完形		無文・印籠蓋式・無鈕	図 1-2
陶製経容器③	19.0	19.1	27.1	完形		蓋残存せず・自然釉 (緑色)・硬質	図 1-3
陶製転用 (壺)			30.7	90	浅黄橙	口縁部意図的な欠失	写真 4
瓦質経容器①	14.9	14.8	28.0	85	灰色	蓋残存せず・瓦製法	図 1-4
瓦質経容器②	12.4 復元	13.8 復元	28.9	70	灰色	蓋残存せず・瓦製法	図 1-5
瓦質経容器③	13.3	13.3 上部	24.1 残存	65	浅黄・明黄褐	蓋残存せず・瓦製法	図 1-6
瓦質経容器蓋			4.3 残存	35		宝珠形の鈕	図 1-7
土師質経容器	13.8	13.7	24.5	75		蓋残存せず・墨書 2 列	図 1-8
副 納 品							
遺物名	法量 (cm)				備 考		図番号
和鏡	直径 10.1				鳥蝶草花文様		写真 7
六器	口径 2 寸 6 分、底径 1 寸 6 分 5 厘、器高 1 寸 5 厘				先学の報告の数値を参照・「二岩」の針書		
青白磁合子①	総高 3.6・身口径 4.9、器高 2.4・蓋径 6.1、器高 1.6				底「氏□合子□」陽刻		写真 8 右
青白磁合子②	総高 2.6・身口径 2.8、器高 1.6・蓋口径 3.5、器高 1.4						写真 8 左
青白磁菩薩像	残存縦 4.2、横 3.2				頭部のみ残存		写真 9
白磁碗	口径 16.4、器高 6.3						写真 10
泥塔	高 8.1、幅 3.3				底部に 4mm の小孔・舟形光背扁平宝塔型		写真 11
ほかに瓔珞・碗・須恵器・小壺・瓦・刀子・合子なども経塚遺物の可能性あり							



写真 2 銅製経筒①



写真 3 銅製経筒②



写真 4 銅製経筒③と陶製壺

るため開けることは叶わないが、総高36.5cmの完形品である (写真2)。村木二郎によって設定された近畿地方の青銅製経筒の型式のうち、一

段笠蓋B式に該当する経筒で (村木 1998)、宝珠鈕を戴き反花座にのる。一段笠蓋B式については、京周辺の花背別所経塚や鞍馬寺経塚、鳩ヶ

峰経塚と紀伊の那智経塚、播磨国内から出土していることが示され、「播磨の三点は宝珠が崩れて来たのかソロバン玉状の相輪形に近い鈕を頂くのに対し、他の六点はいずれも堂々たる大きな台付宝珠鈕をもつ。後者は京周辺に多く見られ、京の貴族の手になる経塚で用いられたと考えられる。」(村木 1998)との指摘がされている。反花座にのる点で非常に注目すべき経筒であり、このほかに類似する事例として挙げるができる経筒は、筆者の管見に触れた限りでは鞍馬寺経塚出土の1例のみである(保坂 1971)。青銅製経筒の中でも屈指の名品といえるもので、経塚研究上も特に注目できる。先学の指摘からも窺えるように、笠置寺の埋経と京の繋がりを示すことができる経筒である。

**銅製経筒②** 蓋が欠失して筒身のみが残存する銅板製の経筒である。2枚の銅板を曲げて作られており、器高29.2cmで残存率は約9割の経筒である(写真3)。曲げて円筒状にした2枚の銅板は、2か所で鋸によって留められている。第1の接合箇所は、最上部が欠けているものの、直線状に7本の鋸により固定されており、第2の接合箇所では同様に1列に配置された8本の鋸で留められている。鋸の位置は等間隔ではない。2枚の銅板の合わせ目は、両接合部ともに正面から観察した場合に、銅板の左側が外側に位置している構造となっている。また、本経筒の破片1片が付属して保管されている。

**銅製経筒③** これも銅板製の経筒で、陶製転用容器(壺)とともに保管されており、陶製転用容器の中に本経筒を入れている(写真4)。この経筒は残存高約28.0cm、厚さ1mm程であり、損傷が激しく蓋は欠失して見当たらない。

ここまで笠置寺の銅製経筒についてみてきたが、経筒の高さと時代による変化が先学によって指摘されている。三宅敏之は、「なお、筒身の高さは、寛弘四年(一〇〇七)在銘の藤原道長の経筒は三三センチとかなり高いが、大勢として、平安時代には二五センチ前後のものが多く、

鎌倉時代には一八センチ前後、室町時代には一〇センチ前後が普通となる」(三宅 1977)と指摘している。この指摘を踏まえれば紀年銘はないものの、笠置寺経塚出土の銅製経筒はすべて平安時代のものであると考えられる。複数時の埋納が行われた経塚や多数の経筒が出土する経塚では、室町時代に下る時期の経筒が見つかる複合的な経塚もみられるが、笠置寺経塚から大きく時期が下る経筒は発見されておらず、笠置寺での経塚造営は平安時代に造営が開始され、さほど長期に亘ることはないと考えられる。

## (2) 陶製経容器

陶製の経容器は、専用品の容器が3点と転用品の容器(壺)が1点出土している(図1)<sup>7)</sup>。3点の専用品の経容器も同様の器形を呈するものではなく、複数時の埋経があった可能性を感じさせるものである。

**陶製経容器①** 三筋文を線刻する専用品の陶製経容器で、類例から用途は外容器であると考えられる(図1-1)。筒身は口径17.0cm、底径16.5cm、器高33.2cmの完形品であり、蓋はつまみと中央部付近のみが残っており、口縁部付近はすべて欠失している。

こうした三筋文をもつ容器の生産地のうち猿投窯では、生産窯の多くに尾張型山茶碗の4型式から5型式が共伴するとされ、13世紀初頭まで生産されたことがわかる(愛知県史編纂委員会編 2007)。三筋文をもつ経容器には先学の編年研究があり、筆者もこうした先行研究を踏まえて、笠置寺経塚の本経容器を含め近畿地方での生産地編年を検討したので、笠置寺経塚例に関係する箇所を抜き出し時期を検討したい(楢崎 1978; 橋本 2025)。

三筋文系陶器の沈線は時代が下るにつれて、沈線の位置が上がっていくとの指摘がされている(楢崎 1978)。くわえて、近畿地方の経塚から出土した三筋文をもつ経容器の段状受け部が簡素化していく傾向と胴部の膨らみも併せて検

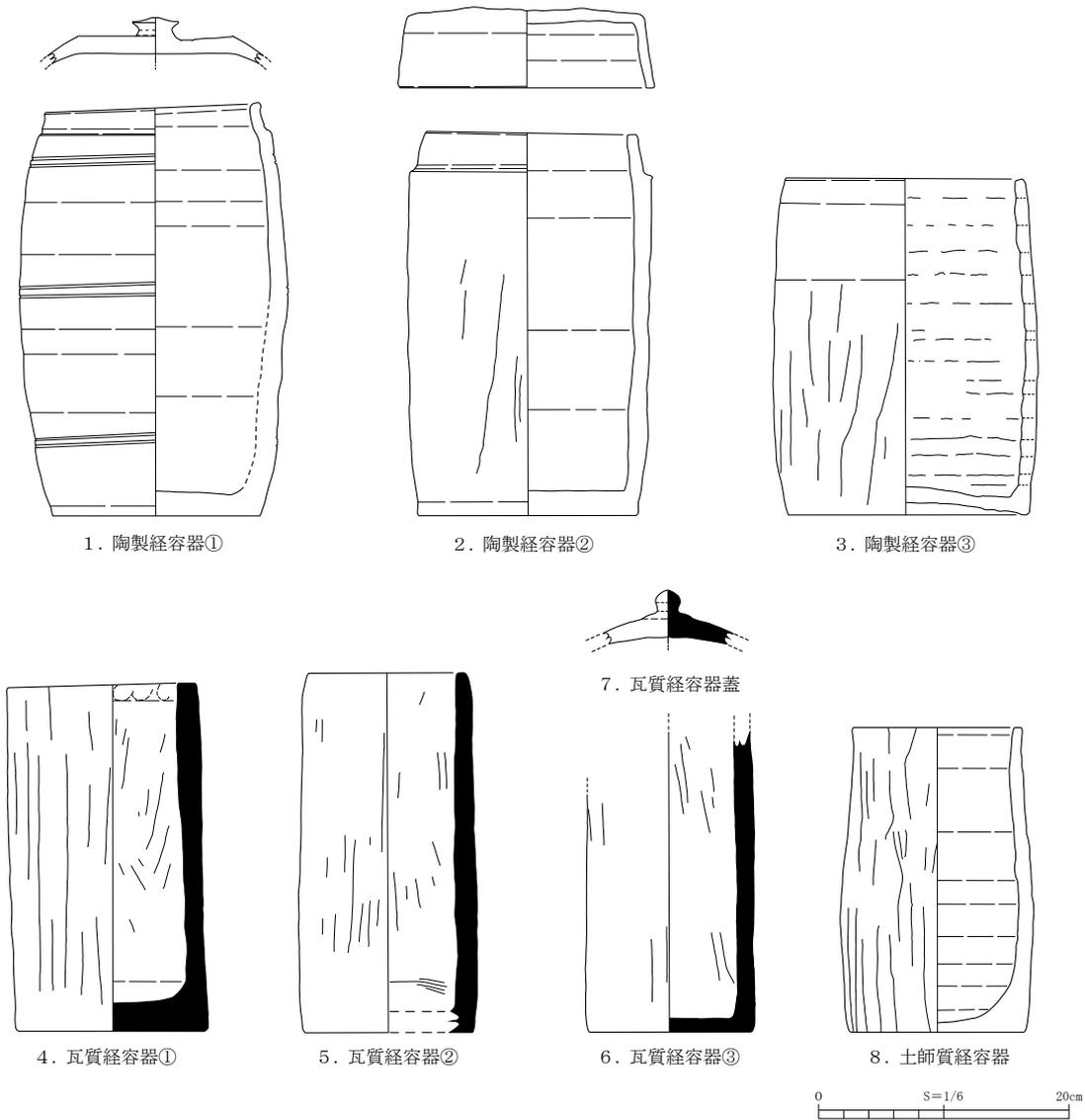


図1 笠置寺経塚の経容器  
(筆者実測・作成／笠置寺蔵)

討するとIV期（12世紀第3四半期）<sup>8)</sup>頃のものであると考えられる（橋本 2025）。IV期に位置付けられる理由として、器形の上では類似する榎尾山経塚例よりも段状の受け部が崩れており、榎尾山経塚の例より後に位置付けられる。そして、同じく口縁部がやや崩れる那智経塚例では沈線が二筋になっており、那智経塚例よりは先に位置付けられることがわかる（秋山 1983; 東京国立博物館編 1985）。榎尾山経塚は、III期に位置付けられると考えられ、三筋と器形を保ちながら口縁部付近が簡素化している本例は一世代

下のIV期に位置付けられる。

**陶製経容器②** 筒身は無文で、口径16.7cm、底径17.6cm、器高30.9cmで、蓋は口径20.4cm、器高6.5cmを測る円筒形の容器である（図1-2）。筒身の口縁部付近は窪められており、いわゆる印籠蓋式に作られている。蓋は天井部が平坦でつまみは持たない。色調は浅黄橙色で白色粒を含んでいる。

近畿地方では、こうした段状の受け部をもち、蓋の天井部が平坦でつまみを持たない陶製経容器が一定数確認されており、類例として朝熊山

10号-G経塚や、稲荷山経塚の例などを挙げることができる(橋本 2025)。これらの容器は、過去に生産地として信楽窯や常滑窯が想定されてきたものであるが、これらの窯で生産窯は確認されていない。筆者は、こうした容器の口縁部形態について検討したことがあり、時期が下ると段状の受け部が簡略化されていくと考えられることから、本例は類似する資料群のうちでは比較的早い段階のものであろう(橋本 2025)。これらの資料は、色調などにやや差異がみられ生産地が1か所であるかなどの問題については検討の余地を残している。

**陶製経容器③** 無文の円筒形を呈する容器で、蓋は欠けており筒身部のみが伝わる(図1-3)。内面に輪積み痕を顕著に残す硬質な個体であり、法量は口径19.0cm、底径19.1cm、器高27.1cmである。広範囲に緑色の自然釉が掛かっている。

**陶製転用容器(壺)** 現在までにみつかった笠置寺経塚関係遺物のなかで、唯一の壺を利用した転用品容器である(写真4)。現在は銅製経筒③が入った状態で保管されており、口縁部は経筒を納めるために意図的に欠失させていて、残存高は30.7cmである。

このほかに転用品の陶製容器はなく、この容器が村木二郎によって常滑焼甕とされた容器にあたると考えられる(村木 1998)。村木論文では、常滑窯の生産地編年である「赤羽・中野生産地編年」の2型式(1150～1175)としている。しかし、口縁部は欠失しており、この容器が常滑窯産の甕で常滑窯2型式と判断することは難しく、産地も含めて保留にしておきたい。

### (3) 瓦質経容器

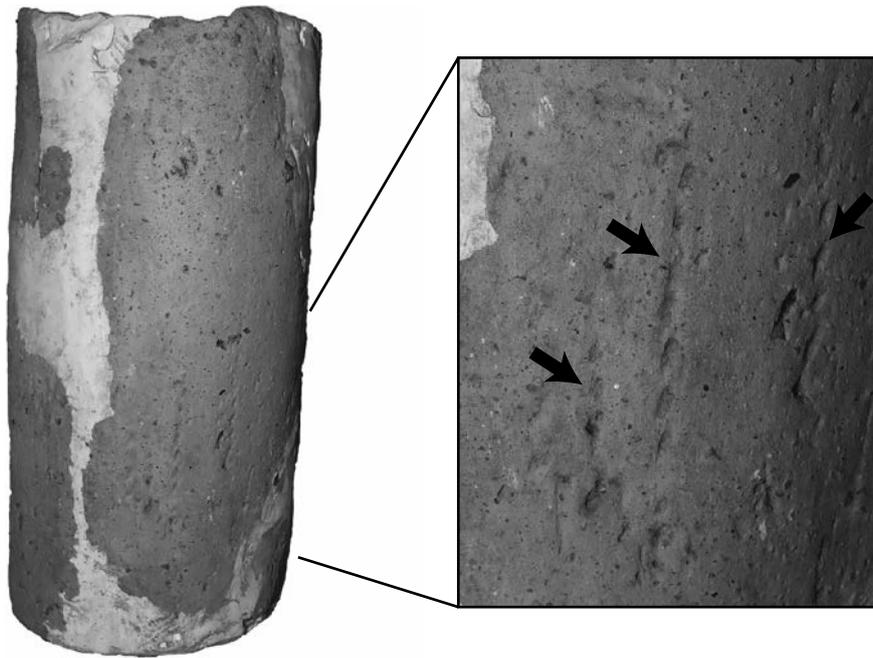
2023年にこれまで存在が知られていた笠置寺経塚出土遺物の調査を行うため、笠置寺を訪問した際に、御住職の小林慶昭氏より既知の経容器類のほかにも経容器が保管されている旨を御教示いただき、併せて調査をさせていただいたものである<sup>9)</sup>。これらの経容器類のなかに、これ

まで笠置寺経塚では確認されていなかった材質である瓦質の経容器が含まれていた。

**瓦質経容器①** 口径14.9cm、底径14.8cm、器高28.0cmで細形の円筒形を呈する容器である(図1-4)。口縁部から上部にかけて一部が欠ける箇所があるが、残存率は8割強程で3本の瓦質経容器のうち最も残存状況が良好で重厚感のある作りである。焼成は良好な瓦質焼成で瓦の質感に近く、色調は灰色を呈する。内外に縦方向の下から上方向のヘラナデがみられ、内面の最下部にヨコナデを施している。内面の口縁部付近は、抑え気味に上方向へのナデ調整を施す。こうした製作の痕跡から、内型に布をあて粘土板を巻き、別作りの底部円盤を合わせる丸瓦の製法と同様の技法によって製作されたことが窺える。内面底部付近のヨコナデは、別作りの底部円盤と円筒部の接合痕跡を示し、ヘラナデは縄叩きや布目の痕跡を消していると考えられる。ヘラナデによって製作痕跡を消していることは、伝新宮経塚などで縄叩きを残す個体が出土していることから明らかである(図2)。内面上部に布目痕を思わせる箇所があるが、不明瞭で明確に布目であるとの確証を得ない。

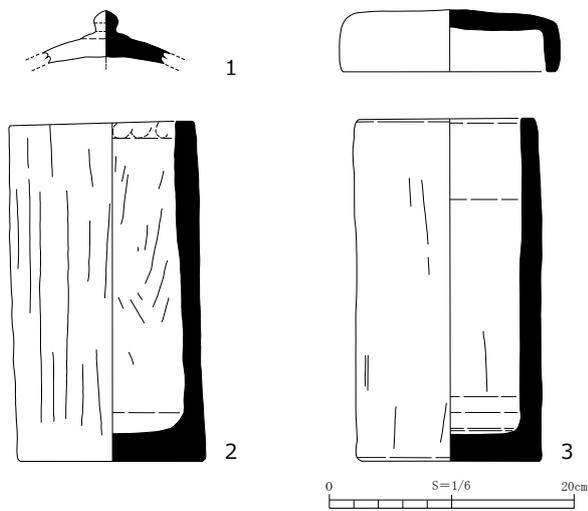
**瓦質経容器②** 上部、下部ともに一部が欠失するため復元値ではあるが、復元口径12.4cm、復元底径13.8cm、器高28.9cmを測る(図1-5)。瓦質経容器①と若干の違いは認められるが、この個体も焼成は良好で瓦の質感に近く灰色を呈する。調整は、内外ともにヘラナデ調整がされた丁寧な作りで平滑に仕上げられている。

**瓦質経容器③** 上部を欠失しており、残存上部径13.3cm、底径13.3cm、残存高24.1cmである。ほかの2点とは異なり焼成がやや不良の軟質であるため、色調も浅黄色・明黄褐色を呈している(図1-6)。不明瞭ながらこの個体も製作技法はほかの2個体と共通しているようで、内外に縦ヘラの痕跡がみられるものの内面は黒色の堆積物・付着物があり不明瞭である。不明瞭ながらヘラ方向は下から上方向であると思われる。



伝 新宮経塚群

図2 瓦質経容器の縄目叩き  
(橋本 2025：筆者撮影／熊野速玉大社蔵)



1. 笠置寺経塚の瓦質経容器蓋 (笠置寺蔵)  
2. 笠置寺経塚の瓦質経容器① (笠置寺蔵)  
3. 正釈寺 (向河原) 経塚の瓦質経容器 (南丹市立文化博物館蔵)  
※1・2にセット関係なし

図3 瓦製法の瓦質経容器と蓋の事例 (筆者実測・作成)

**瓦質経容器蓋** 上記3点の瓦質経容器は3点すべてで蓋は欠失しているが、1点の蓋残欠が出土している (図1-7)。この蓋は宝珠形の鈕が残存し

ており、残存幅長辺9.3cm、短辺8.2cm、残存高4.3cmで、色調は灰色である。

蓋の形状から、上記の3点の筒身とは別の個体の蓋である可能性がある。瓦の製法で作られた瓦質経容器の蓋は、蓋が出土しない事例もあり明らかでないことが多いが、無鈕で筒身部に被さる蓋が多いようである。こうした蓋は、正釈寺 (向河原) 経塚や、横川経塚で出土している (図3、滋賀県教育委員会編 1979; 吉田 1971)。また、東山松原経塚では丸瓦の瓦当部を蓋としており、こうした瓦質経容器の蓋は一様でないようである (蔵田 1965)。笠置寺経塚出土の蓋は宝珠形の鈕をもっており、近畿地方の瓦質経容器の蓋の形態を解明するためにも注目できるものである。

#### (4) 土師質経容器

従来は、その存在が知られていなかった3点の瓦質経容器とともに保管されていたもので、上記の陶製容器3点とは異なり細形を呈している



写真5 墨書①



写真6 墨書②

(図1-8)。一部で上部が欠けているが、復元口径13.8cm、底径13.7cm、器高24.5cmで蓋は伝わっていない。内面はヨコナデによって調整され、外面は工具を使用した縦方向の調整がなされている。外面の2か所に墨書の痕跡があり、左右で対になる位置に近い場所に書かれているが、記された文字の内容は判読できない(写真5、6)。墨書の内容が不明であることもあり、どの段階で記されたものであるかは定かでない。

一応分類のうえでは土師質経容器としたが、近畿地方の土師質容器とは色調・調整が全く異なるものであり、瓦質にも共通する個体で「土製」ともいえる個体である。類似する容器も見当たらず異質な存在といえる。材質での分類は、今後他地域を含めた類例の増加を待って見直しが必要になる可能性がある。

## 2.2 副納品

つぎに経塚の副納品についてみていく。笠置寺経塚の副納品は、和鏡1面、六器(1点)、青白磁合子2点、青白磁の仏像頭部1点、白磁碗1点、泥塔1点である。この他にも笠置寺には、瓔珞・椀・須恵器・小壺・瓦・刀子・合子などが保管されており、これらのうち瓔珞、刀子などは経塚関

係遺物の可能性がある。ここでは、過去に経塚遺物とされたものを中心に法量などの基礎情報を示しておく。

**和鏡** 直径10.1cmの完形品で、鳥と蝶の文様をもつ(写真7)。過去の報告では、「鳥蝶草花文様」とされ、製作時代は藤原時代であると指摘されている(守田・平田1965)。

**六器** 筆者は展示中の六器を実見させていただいたため、先学の報告で指摘された法量や所見をここで示しておきたい(守田・平田1965)。先学で法量は、口径2寸6分(約7.8cm)、底径1寸6分5厘(約4.99cm)、器高1寸5厘(約3.18cm)とされている。底に「二岩」と読める針書きがあることが指摘され、この「二岩」について、堂名か坊名である可能性があると考えられた。

**青白磁合子①** 青白磁製で、蓋を載せた総高3.6cm、身の口径4.9cm、器高2.4cm、蓋の径6.1cm、器高1.6cmの平形合子である(写真8右)。底の外面に陽刻があり「氏□合子□」とも読めるものである。

**青白磁合子②** こちらも青白磁製であり、総高2.6cmで蓋身ともに完存しており、身の口径2.8cm、器高1.6cmで、蓋は口径3.5cm、器高1.4cmである(写真8左)。

**青白磁菩薩像頭部** 青白磁製の菩薩像の頭部であり、頸部付近で割れた痕跡が確認できることから当初は全身があったものと思われるが、経塚造営の段階での状況は不明である（写真9）。残存する頭部は縦4.2cm、横3.2cmである。

**白磁碗** 完形に接合されているもので、口径16.4cm、器高6.3cmを測るものである（写真10）。

**泥塔** 宝塔形を呈し、高さ8.1cm、幅3.3cmで底部には径4mm程の小孔を穿った泥塔で、型抜きによって作られる（写真11）。過去に伊藤久嗣に

よって、「この舟形光背扁平宝塔型泥塔は、伊勢等観寺泥塔などと同形で、或いは同范の可能性はある。」と指摘されている（伊藤 1993）。伊藤は笠置寺経塚例と類似資料として挙げた等観寺などの「舟形光背扁平宝塔型泥塔」について、伊勢での採集場所などから室町時代前半を下限として、平安時代後期から鎌倉時代に遡る可能性をもつと指摘している。

### 3. 笠置寺経塚の位置付け

ここまで、笠置寺経塚の各出土遺物について確認してきたが、これらの出土遺物から窺えることをまとめ、笠置寺経塚の位置付けについて検討してみたい。

#### 3.1 出土遺物にみる笠置寺経塚

##### (1) 笠置寺経塚の性格

ここまでみてきた笠置寺経塚の出土遺物から経塚の性格について検討し、笠置寺経塚の位置付けについて示したい。特に造営主体の階層と



写真7 和鏡



写真8 青白磁合子



写真10 白磁碗



写真9 青白磁菩薩像頭部



写真11 泥塔

地域性という視点に注目してみたい。

まず、銅製経筒からは、京周辺に多く見られ京の貴族の経塚造営で用いられたと考えられると指摘された一段笠蓋B式の銅鑄製経筒が出土していることから（村木 1998）、京に住む造営主体による埋経が笠置寺で行われたことが、考古学の側からも確認することができる。さらに、この経筒は注目すべき反花座をもつ経筒で、類例も僅少で鞍馬寺経塚の出土品にみられる程度である。かなり丁寧に製作されており、高位階層の埋経に関わる遺物の可能性も指摘できよう。青銅製経筒ではないものの、銅塔に反花座をもつ事例が鞍馬寺経塚や奈良原山経塚（反花座は木製）にみられる（滋賀県教育委員会編 1979; 今治市教育委員会 2010）。こうした銅塔や鞍馬寺経塚の経筒、さらには初期の埋経といえる上東門院彰子が長元四年（1031）に横川経塚に造

営した経塚に用いられた銅塔まで初期の経筒に連なる系譜を考えるうえでも、この笠置寺経塚の経筒は重要位置を占めているといえる。

また、筆者が過去に近畿地方出土の陶製経容器について検討したなかで、三筋文をもつ陶製経容器の分布傾向に注目したことがある（橋本 2025）。こうしたなかで、近畿地方では専用品の陶製経容器が比較的広域に分布するが、三筋文をもつ経容器の出土地は山城周辺や熊野に集中している。このなかには、経筒の共通する鞍馬寺経塚や、瓦質経容器の出土する横川経塚などが含まれている。こうした分布などから、筆者は京の貴族層によって使用されたものであることを指摘した（図4）。これらは東海地方の窯で焼かれた専用品で、特注品を取り寄せていることから有力者によって使用されたことがわかる。笠置寺経塚からも三筋文をもつ専用品



1. 笠置寺経塚 2. 打見山経塚 3. 横川経塚 4. 花背別所経塚 5. 鞍馬寺経塚  
6. 弁天島経塚 7. 清水寺経塚 8. 南原（石作）経塚 9. 白川金剛院経塚  
10. 榎尾山経塚 11. 粉河産土神社経塚 12. 那智経塚 13. 神倉山経塚

図4 陶製経容器（三筋文）の分布（橋本 2025 に加筆）

の陶製経容器①が出土しており、やはり京との関係の深さが窺えるといえよう。

さらに、瓦質経容器からも経塚の位置付けを示すことができる。近畿地方の瓦質経容器には、土器の製法によって製作されたものと瓦の製法によって製作されたものとがみられるが、笠置寺経塚の3点の瓦質経容器は瓦の製法によって製作されたものである（橋本 2025）。拙稿で筆者が近畿地方の瓦質経容器B類やC類とした瓦製法で製作されたと考えられる瓦質経容器が出土した経塚は図5のとおりである<sup>10)</sup>。分布の傾向として、京周辺や熊野に多いことが窺える。笠置寺経塚出土のものと特に類似する、縦方向のヘラ状工具によって製作痕をナデ消す個体には、横川経塚や正積寺経塚などの例を挙げることができる。

従来では、こうした瓦質の経容器は高級材質

による容器の模倣品とされていたが（菅原 1989）、筆者は瓦の製法による特注品と土器製法の容器に分けられることを提示し、瓦の製法のもものは京周辺や熊野三山などの出土地の傾向から京との関わりを指摘した（橋本 2025）。こうした瓦製法の瓦質経容器も京の経塚造営との関係が窺えるものであるといえるもので、笠置寺経塚から瓦製法による瓦質経容器が複数出土していることから、京との関係が窺える。

このように、笠置寺に造営された経塚は京の経塚造営との深い関連性がみられることが出土遺物によって裏付けられる。『玉葉』に記載された慈円や九条兼実の経塚に関連した経容器を特定することはできないものの、反花座をもつ青銅製経筒や三筋文をもつ陶製経容器、磁器製品から高位層の埋経があったことを考古学的にも指摘することができ、文献と考古資料の双方か



1. 笠置寺経塚 2. 東山松原経塚 3. 南原（石作）経塚 4. 横川経塚
5. 九条経塚 6. 正積寺（向河原）経塚 7. 藤山経塚 8. 御蓋山（春日山）経塚
9. 備崎経塚 10. 那智経塚 11. 新宮経塚群

図5 瓦製法による瓦質経容器の分布（筆者作成）

らの成果が一致する結果となった。

## (2) 造営の時期

つぎに、出土遺物から経塚の造営期間についてみていく。これまで紀年銘をもつ資料は確認されていないが、出土遺物からおよその造営期間を窺うことができる。

銅製経筒は、現在までに見つかっている3点すべてで器高が高く、製作年代を平安時代に比定できるものである。複数の経塚が営まれる遺跡では、造営が長期に亘る遺跡もみられるが、笠置寺経塚からは室町時代に下るような経筒は見つかっていないので、平安時代を中心とした比較的短期間の造営であった可能性がある。

また、陶製経容器からも三筋文を刻する陶製経容器①の年代が、12世紀第3四半期頃の年代をあてることができることを確認してきた。さらに、本論でも度々類例として挙げた横川経塚では長元四年(1031)から常滑窯編年2型式(1150～1175年)の年代が特定できる遺物が発見されている(滋賀県教育委員会編1979;中野1995)<sup>11)</sup>。鞍馬寺経塚では、保安元年(1120)や治承3年(1179)の銘をもつ経筒が出土している(保坂1971)。上東門院彰子の埋経はこのなかで突出して古いものの、ほかは凡そ12世紀第2四半期から第4四半期であり、笠置寺経塚もこうした経塚と同時期に造営されたと考えられる。銅塔の出土した奈良原山経塚も外容器から12世紀前半に位置付けられている(今治市教育委員会2010)。

このように笠置寺経塚は、平安時代に造営が開始され長期には亘らない期間に複数の造営主体による埋経が行われたと考えられる。しかし、笠置寺の経塚遺物は不時の発見によるものであり、今後新たに経塚関係遺物が発見される可能性もあり、それらの遺物の年代次第ではもう少し造営終了の時期が下る可能性があることには注意が必要である。埋経の記録はないものの『三長記』には、元久三年(1206)に弥勒の御前で行われた供養の様子が記されており、鎌倉時代

の初頭までこうした埋経行為が続けられた可能性も想定しておかなければならない<sup>12)</sup>。

## 3.2 『玉葉』の記載と経塚の造営位置

ここまで、出土遺物を中心に笠置寺経塚についてみてきたが、最後に笠置寺での埋経行為について『玉葉』に記載された埋経も含め、埋経地という視点から検討してみたい。

『玉葉』に記載された埋経場所については、「靈屈」との記載がある<sup>13)</sup>。先学の『玉葉』に記載された埋経地「靈屈」についての解釈として、三宅敏之は靈窟がどこを指すかは不明だが、笠置寺の境内かその近くであったとしている(三宅1958)。一方で、豊島修や小林義亮は、境内の「千手窟」と解釈している(小林2023;豊島1978)。「千手窟」は、弥勒菩薩の住む兜率天に繋がるとされ、実忠がここから兜率天に上ったことで有名である。現在の笠置寺山内で、靈窟の指すところを検討すると候補地の筆頭に挙がることに違いはないが、「靈窟」が「千手窟」であった可能性を完全に否定することはできないものの、ここでは『玉葉』記載の埋経以外にも含めた埋経地の別の可能性について提示しておきたい。

筆者は、不時の発見であるものの、複数時期に亘ると考えられる経塚関係遺物の発見場所が弥勒磨崖仏の付近であることから、当時の埋経場所の中心は弥勒磨崖仏の付近であったと考えている(写真12)。『玉葉』記載の「靈屈」も「千手窟」ではなく、本尊である弥勒磨崖仏の付近であった可能性は排除すべきではなく、この場合の「靈屈」にあたる場所の候補地として、筆者は本尊脇の窪みなどの可能性があるのではないかと考えている。

こうした、推察を補強しうる要素として、先学でも弥勒石仏のすぐ前の岩の窪みから出土していると指摘されるように、現在までの経塚関係遺物の出土地が弥勒磨崖仏付近に集中していることが挙げられる<sup>14)</sup>(小林2023)。



写真 12 弥勒磨崖仏付近

さらに、『三長記』の記載によれば、藤原定家が自ら書写した法華経や弥勒上生経などを弥勒の御前において供養を行っており、解脱上人貞慶を導師とした供養が行われたようである<sup>15)</sup>。この記載には埋経の記載こそないものの、弥勒御前での供養を行っている。こうした記録からも、あくまで供養の中心は弥勒磨崖仏であったとみることができるだろう。こうしたことからいえば、埋経地も弥勒磨崖仏より少々下った箇所「千手窟」ではなく、弥勒磨崖仏の周辺とみておくほうが穏当ではないだろうか。

経塚の出土遺物から造営期間は長期には亘らないものの、複数の埋経があったことは明らかで、記録に残る慈円の埋経以外でも複数回行われたと考えられるが、現在までに発見されている経塚遺物の出土場所が、弥勒磨崖仏のそばであることはこうした考察を裏付けているのではないか。

しかし、「なお経塚遺物かどうかは判然としませんが、今でも薬師石や文殊石の前面の傾斜からは、時たま素焼きの壺など祭祀に使用したと思われる器具が出土している。」と指摘されており(小林 2023)、今後さらに発見される可能性がある境内からの出土品に経塚遺物が含まれることも考えられるので、今後も経塚遺物が含まれていないか慎重に確認しておく必要がある。

## まとめ

本論では、豊富な経塚関係遺物が発見されていながらこれまで考古学的な研究が進んでいなかった笠置寺経塚の出土遺物について法量などの基礎的な情報を公表し、それぞれに時期や類型に関する検討を行ってきた。

笠置寺経塚の造営時期は、銅製経筒や三筋文をもつ陶製経容器①などから12世紀であることがわかり、特に12世紀第2四半期から第4四半期頃に複数の造営主体によって造営が行われた可能性が高いことが明らかになった。さらに、経筒の型式や三筋文をもつ陶製経容器①、瓦の製法による瓦質経容器から京との関係の深さを考古学的に裏付けることができ、貴族層の造営があったことが出土遺物の面から明らかになった。『玉葉』の記載も含めて、経塚造営の中心であった場所についても検討を行い、弥勒磨崖仏の周辺が埋経地の中心であった可能性が高いことも明らかになった。

弥勒磨崖仏を本尊とする弥勒信仰の聖地といえる笠置寺への埋経の背景や造営実態の一端が明らかになり、こうした造営主体が京との関係の深さが考古学的に裏付けられたことから、経塚研究を通して当該時期の社会の動きや信仰の状況を解明する研究の可能性がみえたと思われる。

今後もこうした経塚研究を通して、中世社会の実態解明へと踏み込む研究へと昇華させていきたい。

## 謝辞

本論を草するにあたっては、国立歴史民俗博物館の村木二郎先生にご指導をいただきました。資料の閲覧や調査で笠置寺御住職の小林慶昭氏と先代御住職の小林慶範氏に多大なる御協力・御教示をいただきました。また、調査や資料の掲載については京都府立山城郷土資料館、熊野速玉大社、南丹市立文化博物館(順不同・五十音順)の御高配を賜りました。末筆ながら記し

て感謝申し上げます。

## 註

- 1) 笠置寺経塚や出土遺物については、笠置寺御住職の小林慶昭氏と先代御住職の小林慶範氏に多くの御教示をいただいた。
- 2) 『玉葉』文治元年（1185）八月廿三日条、『三長記』元久三年（1206）四月十二日条
- 3) 『玉葉』文治元年（1185）八月廿二日条
- 4) 『玉葉』文治元年（1185）八月廿三日条
- 5) 奈良国立博物館での特別展に出陳・掲載されたのは、銅製経筒3点、壺（外容器）1点、陶製外容器2点、白磁碗1点、青白磁合子2点、青白磁菩薩頭部1点、銅鏡1面、宝塔形泥塔1点である。ここに記載した名称については、図録掲載の名称に統一した。
- 6) 名称については先学とは異なるものがある。用途が明確にできないことなどに起因しており、本論では広く「経容器」の名称を使用しているものがある。
- 7) 拙稿で笠置寺経塚の遺物について、陶製経容器4点、陶製甕1点としたが、うち1点が陶製呼称することが難しく、注目する箇所によって分類が変わるであろう難解なものである。しかし、燻しはなく焼成もやや軟質である、近畿地方の土師質のなかでは異質なものであるが「土師質」に修正したい。また、甕は口縁部が欠失しているが口径に比較して最大径の張り大きいことも想定され壺に修正したい（橋本 2025）。
- 8) 榑崎編年、拙稿での近畿地方の消費地編年ともに、時期区分はI期（11世紀）、II期（12世紀第1四半期）、III期（12世紀第2四半期）、IV期（12世紀第3四半期）、V期（12世紀第4四半期）、VI期（13世紀）である。
- 9) ほかに接合できる浅鉢状の土器片などが保管されていたが、経塚関係遺物であるか不明であり本論ではこうした少量の破片類は割愛した。
- 10) 筆者は、拙稿において未見であった南原（石作）経塚の経容器4点について、先学に従い土師質に分類し、註において瓦質に分類できる可能性がある」と記した。本経容器類について時枝務が瓦の製法である旨を記しており、この4点について瓦質（瓦製）に修正したい（時枝 2009; 橋本 2025）。
- 11) 筆者の作成した三筋文をもつ専用品経容器の編年から12世紀第4四半期まで造営が続く可能性を指摘している（橋本 2025）。

- 12) 『三長記』元久三年（1206）四月十二日条
- 13) 『玉葉』文治元年（1185）八月廿三日条
- 14) 筆者が2023年に笠置寺で行った調査の際にも先代御住職の小林慶範氏より、遺物の出土場所はいずれも本尊の近く（本尊前の石段の上）で、今から40年ほど前のことあったとの御教示をいただいた。
- 15) 『三長記』元久三年（1206）四月十二日条

## 引用・参考文献

- 愛知県史編纂委員会（編）  
2007 『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県。
- 秋山進午  
1983 『和泉槇尾山経塚発掘調査報告書』和泉市久保惣記念美術館。
- 伊藤久嗣  
1993 「「泥塔」小考」『斎宮歴史博物館 研究紀要』2: 55-61。
- 今治市教育委員会  
2010 『国宝 伊予国奈良原山経塚出土品』。
- 蔵田 蔵  
1965 「東京国立博物館保管近畿地方出土の経塚遺物下」『MUSEUM』177: 15-29。
- 小林義亮  
2023 『笠置寺激動の1300年：ある山寺の歴史〔増補改訂新版〕』ミヤオビパブリッシング。
- 滋賀県教育委員会（編）  
1979 『滋賀県文化財調査報告書』7。
- 菅原正明  
1989 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』19: 167-308。国立歴史民俗博物館。
- 東京国立博物館（編）  
1985 『那智経塚遺物宝』東京美術。
- 時枝 務  
2009 「妙楽寺経塚の瓦製経筒」『妙楽寺経塚』宇佐市教育委員会。
- 豊島 修  
1978 「笠置寺の修験道」『近畿霊山と修験道』: 140-159。名著出版。
- 中野晴久  
1995 「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』: 29-41。小学館。
- 奈良国立博物館（編）  
2023 『聖地 南山城—奈良と京都を結ぶ祈り

- の至宝一』奈良国立博物館・日本経済新聞社・テレビ大阪。
- 榎崎彰一  
1978 「初期中世陶における三筋文の系譜 第一部三筋文系陶器とその編年」『名古屋大学文学部研究論集LXXIV』史学25: 99-146。名古屋大学文学部。
- 橋本侑大  
2025 「近畿地方における経容器の研究」『総研大文化科学研究』21: 39-112。
- 保坂三郎  
1971 『鞍馬寺経塚遺物』中央公論美術出版。
- 村木二郎  
1998 「近畿の経塚」『史林』81(2): 69-110。
- 三宅敏之  
1958 「経塚の営造について—藤原兼実の埋経を中心として—」『史學雑誌』67(12): 36-50。

- 1977 「経塚の遺物」『新版仏教考古学講座』6 経典・経塚: 70-140。雄山閣出版。
- 守田公夫・平田 寛  
1965 「笠置寺調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1965』: 15-19。国立奈良文化財研究所。
- 吉田 清  
1971 「廃寺園部善願寺攷」『仏教史学』15(2): 144-159。

### 写真出典

写真1～12。筆者撮影（2～11笠置寺蔵）2023年撮影。

2025年8月29日 受付  
2025年11月17日 採択決定